博士学位論文審査要旨

学位申請者氏名　小宮山　真美子
論文題目　*Retold Narratives in America: The Voice of Reclaiming Mourning for the Dead*
審査委員（ 職名・氏名・印 ） 主　　査　教授　庄司　宏子 審査委員　教授　遠藤　不比人 　　教授　日比野　啓
論文審査結果（ 合　否 ）
論文審査の要旨 　小宮山氏の論文は、19 世紀アメリカ合衆国の代表的作家 Nathaniel Hawthorne の初期から最晩年までの小説を、作家が自らの短編集に繰り返し付けたタイトル “Twice-Told Tales” を分析ツールとして読み解くものである。Twice-told tales、すなわち「二度語られた物語」とは William Shakespeare の *King John* の一節 “life is as tedious as a twice-told tale”（「人生とは二度語られた（言い古された）物語のように退屈で陳腐なものだ」）に因むもので、従来、ホーソンの謙虚さと同時に「二度語るに価する」物語を世に問うという自負を表し、奇妙な二重性を示していると捉えられてきた。小宮山氏は “twice-told” を文字通り「二度語りをする」という作家の創作の戦略と捉える。一度目の語りとは物語の素材となるアメリカ植民地時代の歴史にまつわる物語（原テクスト）であり、二度目の語りとは原テクストをホーソンが 19 世紀南北戦争以前のアメリカの時代のコンテクストにおいて再生し、再解釈を施した物語であるとする。小宮山氏は二度目の語りにおいて、Judith Butler の “mourning” の概念を援用しながら、植民地時代に起こった先住民との戦いや魔女事件で犠牲となった人々の記憶を 19 世紀アメリカの文学テクストのなかで服喪・埋葬の対象とし、国家的な歴史記憶の中に位置づけるという役割を重視する。原テクストを内に含みながら「語り直された（retold）」物語」としてホーソンの初期短編から代表的ロマンスの二作品、晩年の未完成で残された小説までが分析読解される。 　第 1 章では、1825 年に魔女事件を材料に書かれたものの、そのセンセーショナルな内容ゆえに出版に至らず廃棄され、1835 年に改稿出版された “Alice Doane’s Appeal” が

論じられる。1692 年に Salem で起こった魔女裁判にまつわる物語を原テクストとし、それをホーソンその人を思わせる語り手が物語を再構成して同時代の読者に向けて語るという入れ子細工の構成をもつこの短編小説は、小宮山氏の「語り直された（retold)）物語」というスキームに合致している。独立から半世紀を経た 19 世紀前半のアメリカでは国民国家の構築の一環として、魔女事件を含め植民地時代の出来事を自国の歴史に再編する Colonial Revival の動きが高まるが、小宮山氏はホーソンは公的歴史とは異なる counter narrative を提示していると結論づける。

第二章では、同じく植民地時代の白人入植者と先住民との間に起こる 1725 年の戦い Lovell's Fight を原テクストとする "Roger Malvin's Burial"（1832)が論じられる。先住民との戦いで瀕死の傷を負った Malvin による「再びこの荒岩の地に戻り、自分の骨を埋葬し祈りの言葉を捧げてほしい」という今際の願いに応じなかった Reuben Bourne に起こる悲劇に、アメリカは入植時代の暴力とその犠牲者を服喪する公的記憶を形成しておらず、先住民に対する開拓者の罪を含め過去と向き合うことがアメリカの未来にとって必要だという作家のメッセージを読み取る。

第三章は、ホーソンの代表作にしてアメリカ文学の傑作と目される *The Scarlet Letter* (1850)が取り上げられる。1640 年代の Boston で起こる Hester Prynne と牧師 Arthur Dimmesale との姦通事件という原テクストをセイレム税関職にあったホーソンが 18 世紀に実在した同税関職員 Jonathan Pue の遺稿のなかに見つけるという仕掛けをもつこの物語に、小宮山氏は植民地時代の出来事を世代を超えて共同体のなかで伝承するプライベートな記憶の持続こそ、その後の独立革命にいたる「国民」形成と関わるものであり、それは登場人物 Dimmedale が公的儀式の場で説教者として発する声に "sympathy" で共鳴する民衆の情動から生まれてくる国民意識とも繋がるものであると論じている。

第四章では、17 世紀末の魔女事件に端を発し、物語の現在である 1840 年代まで何世代にもわたって繰り返される Maule 家と Pyncheon 家の対立を描く *The House of the Seven Gables* (1851)が取り上げられる。この章では 1839 年にフランスで発明されるや直ちにアメリカでも流行する Daguerreotype という写真術が「語り直し（retold)）」のテクニークとして解釈されている。Daguerreotype によって生み出されるオリジナル（被写体）とコピー（写真）との関係は、Maule 家と Pyncheon 家の対立にまつわる過去の謎を解明する糸口ともなり、両家の和解を成就するが、こうした結末は魔女事件を口実に土地を奪われ殺される初代 Maule を含めた犠牲者への哀悼であり、それは 19 世紀前半にアメリカで台頭する公園墓地運動にも現れる時代の精神であると論じられている。

第五章では、ホーソンがアメリカ帰国後に執筆した未完成小説 *Septimius Felton*、および "The Ancestral Footstep"、"Etherege"、"Grimshawe" からなる、アメリカ人が祖先の故郷の地イギリスの土地家屋の所有権を主張する物語群 "The American Claimant" Narratives が論じられている。イギリスのリヴァプール領事の任にあったときの経験に基づき、また南北戦争勃発時のアメリカの激動の情勢のなかで執筆されたこれらの遺稿から、ホーソンの最晩年の国家に対する思想が読み取られている。

以上、ホーソンの 1830 年代から 1860 年代までの小説が原テクストを内に含みつつ「二度語られる（語り直される）物語」として読解される。審査員からこの手法について、

従来ホーソン文学を論じる際に議論され批評の対象となってきた「ロマンス」との関係に関する考察が希薄であり、小宮山氏の分析手法がホーソン研究にどのような貢献をもたらすものであるかの位置づけも十分ではないという指摘があった。「二度語り」というスキームに入れ込もうとするあまり、各論の小説の分析が精緻さを欠く箇所が見受けられる。さらに、先住民に対する暴力や魔女事件というアメリカ植民地時代の歴史的外傷（トラウマ）をどのように物語化しその延長線上に新たな national narrative を紡ぐかという議論が中心となっているが、外傷という定義上表象不能なものを表象しようとする文学テクストがどのような形式的な歪みを被り、また表象不能な残余がテクストのいかなる痕跡となっているのか、そのような議論があればテクストの細部に関してより洞察ある読解ができたであろうという指摘があった。物語化不能な過剰な残余（歴史の亡霊の現前）こそはホーソン的なテクスト性の本質をなす要素ではないか、ホーソンのロマンスは定義上歴史的なトラウマに晒された者たちを一種の証言者として召喚し彼らの声を全知の話者が包摂管理するという形式をとるが、トラウマ理論における証言の根源的不可能性という問題を考慮するときに、上記の物語形式にいかなるインパクトがあるのか、それについての議論もあれば論は深みを増したであろう。

以上のように、テクスト読解や理論的目配りの点で今後のさらなる研鑽が期待されるところがあるが、第五章の“The American Claimant”Narratives に関する論は、これまでホーソン研究ではほとんど論じられていない分野であり、最晩年の作家の草稿や友人に宛てた手紙からその思考の軌跡に迫ろうとする意欲的な論考といえる。小宮山氏の「二度語り」という分析手法は、ホーソンが植民地時代のトラウマに満ちた歴史記憶を 19 世紀において蘇生し、マニフェストデスティニーに駆動される領土拡大時代のアメリカのなかで構築される、ややもすると国家プロパガンダ的な national narrative の構築に対し、ホーソンがその文学的営為のなかで批評しているとするもので、アレゴリーを多用し難解にして深甚なこの作家の政治性を問う研究である。何より、小説が self-generating power、すなわち時代を超えて再生持続する創造的メディアであることを再確認させてくれる小宮山氏の論文は、博士（文学）の学位にふさわしいものである。